

事ことに感かんず（于う瀆ふん）

花はな 開ひらけば 蝶ちよう 枝えだに 満みつ

花はな 謝しゃすれば 蝶ちよう 還また 稀まれなり

惟ただ 旧きゆう巢そうの 燕つばめ 有あり

主人しゆじん 貧ますしきも 亦また 帰かえる

花開蝶満枝 花謝蝶還稀
惟有舊巢燕 主人貧亦歸

解説 世間の人情の軽薄なさまを諷刺した詩。

語釈 ※花Ⅱ富貴権勢の人のたとえ。※満枝Ⅱ軽薄な人びとが富貴権勢の人のもとにむらがり集まることのたとえ。※謝Ⅱ花の散り落ちること、ここは富貴権勢の人が没落してしまったことのとえ。

通釈 花が咲くと蝶はその木の枝に群がり集まってくる。ところが、花が散ってしまうと、もうその枝には蝶は来ない。ただ、前から巢を作っていた燕だけは、その家の主人が貧乏であっても、去年の古巢を忘れずにまたもどってくる。

（世間の軽薄な人びとは、富貴権勢の人のところにむらがり集まるが、その人がいったん没落してしまうともう見向きもしない。ところが、厚情の人だけは相手が貧困になっても、深い交わりを結んでいる）